

ヤングケアラーの歴史的考察

高橋 雅人^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

日本では、子どもが家族の介護をすることを美徳とする価値観が古くから存在し、行き過ぎた家族の介護を強いられている子どもたちがいる。この問題の考察なくして、ヤングケアラーの諸問題の解決には至らないと考えている。本研究では、ヤングケアラーのような子どもたちが存在していたことを明らかにし、彼らが背負っていた背景や問題を歴史的視点で振り返り検証した。その作業の一環として、史実に基づく史料を取り上げた。

【キーワード】

ヤングケアラー、史実、貧困、孤立

1. 問題提起

日本でのヤングケアラーの支援は、ようやく始まったばかりである。「令和2年度 ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書」によると、中学2年生の5.7%、全日制高校2年生の4.1%が「世話をしている家族がいる」と答えている¹。明らかに、ヤングケアラーと呼ばれる子どもたちが身近にいることがわかってきた。さらに、それらの調査では、ヤングケアラーの声や要望を拾い上げたことにより、彼らのニーズも明らかになってきている。

「ヤングケアラー」とは、「本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っているこどものこと²」である。澁谷（2020）によると、「2014年頃からこうしたヤングケアラーが注目され、具体的な事例も取り上げられるようになった（中略）ヤングケアラーという言葉は割と短期間ですんなりと受け入れられ、子どもの権利や教育の機会を守ろうという方向で支援が考えられるようになってきた³」と紹介されている。あわせて、テレビや新聞、雑誌などの大衆媒体やSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）などで取り上げられるようになり、ヤングケアラーに対する社会の関心も高まってきた。

そのようなヤングケアラーの動向と相まって、家族の介護や世話を「家族の支え合い」と

いう美談と解釈する考えが、日本社会には根付いているという指摘もある⁴。筆者が児童自立支援施設に勤務していた時にも、現在のヤングケアラーのような子どもたちがいた。当時はヤングケアラーの概念はなかったが、「家族の世話が忙しく遊べずに家を飛び出した子」「ひとり親家庭で家事を一手に引き受けて勉強に遅れが出てしまい不登校になった子」という印象が残っている。

このように、「子どもが家族の介護や世話をすることは以前より存在していた」と仮定すると、ヤングケアラーは古くから存在し、新しく浮かび上がった社会問題と言えるのではないだろうか。あわせて、子どもが家族の介護や世話をすることを美徳とする価値観があったとすれば、それは介護の当事者である子どもの立場で考えられたことではない。このように、子どもが家族の介護や世話をすることを当たり前としてきた価値観を問題視せず、素通りしてきた過去に筆者の問題意識がある。

そこで本研究では、「子どもを主体としていなかった過去」という観点で歴史を振り返り、ヤングケアラーのような子どもたちが存在していたことを明らかにしたい。さらに、そこから生じた問題を整理し、今後の課題を探りたい。

2. 研究の方法

本研究の目的を明らかにするために、史実に基づいた文献及び新聞記事^{註1}を史料として検証する。史実に基づいた史料は、各時代の社会背景を詳細な裏付けから調査しているため、ヤングケアラーのような子どもたちが存在していた過去を探るには、十分な客観的判断ができると考えられる。

3. 史実に基づいた検証と考察

ヤングケアラーの本格的な研究が開始されて日が浅いが、家族の介護や世話をすることを美德とする価値観に疑問を呈する見解は抄出できる。

澁谷 (2018) は、「おそらく、年輩の方々のなかには、子どもや若者が家族のケアをするのは良いことだと考える人もいるだろう。家族が助け合って世話し合うのは当たり前という感覚もあるかと思う。確かに、子どもや若者が家族の世話をする話は、昔から存在していた⁵」と述べている。

川浦 (2021) は、「親の手伝い」という善行」と題して、「ヤングケアラーに相当する存在は昔からいました。歴史を遡れば、ある程度の年齢になれば、子どもは当然のように親を手伝うものであり、労働力として扱われました(中略)あくまでも大人が「主」で子どもが「従」でなければ、「手伝い」とは言えません。ヤングケアラーに相当する子どもは明らかにその範疇を逸脱しています⁶」と述べている。

しかし、一概に「手伝うこと」が悪いというわけではない。麻生 (2016) は、「日本でも、年長の子どもが年少の子どもの世話をしたり遊び相手をするのは、六〇年ほど前まではごく普通に見られたことだった⁷」と述べている。行き過ぎた家族の介護や世話でなければ、親の手伝いは道徳心や倫理観が養われ、子どもが成長する上で重要であることが示されている。

当事者の子どもはどのように思っているのだろうか。「令和2年度 ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書⁸」にある、子どもの声を紹介したい。「大人がすべき事を子どもがせざるを得ない環境について、「凄いね！偉

いね！」と賞賛すれば子どもは嫌だと言えなくなってしまうと思う。周りの大人たちが褒めるのでは無く、心配し、解決策を提案すること、それを理解してあげる事が重要だと思う」。つまり、大人からの賞賛は不要であり、賞賛より解決策が欲しいというヤングケアラーの要望が語られている。

あくまでも、「主体の対象は子ども」という視点を持つことが大切であると示唆されている。

(1) 文献からの検証と考察

親孝行を主題にし、道徳心や倫理観を養うことを目的とした物語は数多くある。一例として、「養老孝子伝説」は有名である。しかし、史実を基準とすればその数は限られてしまう。本研究では、史実と思われる二作品を検証の対象とする。

① 『あゝ野麦峠—ある製糸工女哀史』

本作は、飛騨地方の糸繰工女たちが明治から大正にかけて製糸工場で労働した記録を、山本茂実がインタビュー(聞き取り)調査したもので、1968(昭和43)年に刊行された。

本作に登場する工女は幼年労働者である。雪深い野麦峠を越えて製糸工女になった理由について、「山国の飛騨では春の蒔きつけ、秋の収穫がすむとくちべらしに信州へ糸ひきに出るのがそのころのならわしで、それをだれもふしぎにも不足にも思う者はなかった⁹」と語られている。当時の社会背景として、「子どもは、貧困と家父長的家族観に基づく親のため、家族のための存在という考えがあった¹⁰」というような指摘がある。「家族を助けるため働きに出る」という経済的理由により、子どもたちは大人の考えに従うしかなかったことが読み取れる。貧しい家計を助けるために出稼ぎに赴く工女の姿は、「児童強制労働」の印象を受ける。

さらに詳しく工女たちの過酷な労働実態が語られている。「はじめて糸ひきに出る子をシンコ(新工)といったが、小学校四年(明治42年までの義務教育)を出たか出ない十二、三歳のまだいたいけな子供である」「七つの年に子守りにいって学校は知らない。十二の年に野麦を越えて諏訪へ来た。二月の野麦峠はみんな素

ワラジで越えたが、足が冷くて泣いて越した」。これらの語りから、貧しい家計を支えるための幼年労働の実態や、満足な教育の機会すら与えられていなかったことがわかった¹¹。

また、本作付属の統計記録には、無学の者、片かなを読める者などの人数や比率が記され、不就学者が多い実態が読み取れる¹²。さらに、「高温と高湿度の工場内（中略）一步外に出ればたちまち真冬の風が吹いている極端な感温の製糸工場生活はよほど健康な者でも風邪をひきやすい。ましてや夜業残業の過労がたたって体力はおちている。それはまたとない結核の苗代であり温床であった¹³」というように、工女たちの置かれた環境は過酷であり、不治の病であった結核罹患者が多くいたことも記録されている¹⁴。まさに、一人の人として扱われていなかった事実が読み取れたのである。

そのような実状を受けて社会は動き出した。子どもたちの労働条件を見直す「工場法」や「児童虐待防止法」が制定されたのである。

「工場法」は1911（明治44）年公布、1916（大正5）年施行された。

「第二条 工業主ハ十二歳未満ノ者ヲシテ工場ニ於テ就業セシムルコトヲ得—

第三条 工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ヲシテ一日ニ付十二時間ヲ超エテ就業セシムルコトヲ得—

第四条 工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ヲシテ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得—¹⁵」

要約すれば、12歳未満の児童の使用禁止、15歳未満の児童及び女子の12時間を超える労働及び深夜労働の禁止が規定された。

さらに、1933（昭和8）年、「児童虐待防止法」が衆議院、貴族院の審議を経て制定された（本法は14歳未満が対象）。

「第七条 地方長官ハ軽業、曲馬又ハ戸々ニ就キ若ハ道路ニ於テ行フ諸芸ノ演出若ハ物品ノ販売其ノ他ノ業務及行為ニシテ児童ノ虐待ニ涉リ又ハ之ヲ誘発スル虞アルモノニ付必要アリト認ムルトキハ児童ヲ用フルコトヲ禁止シ又ハ制限スルコトヲ得—¹⁶」

要約すれば、児童の禁止業務や制限業務が規

定された。

「工場法」や「児童虐待防止法」が制定されたことで、子どもたちの環境は改善に向かっていったと推察されるが、そこに至る背景には、経済的理由と家父長的家族観に抵抗できずに、過酷な労働を余儀なくされた子どもたちがいたことを忘れてはならない。史実に基づいた文献調査より、過酷な労働に抗えない子どもたちの、人権が軽視されていた事実が確認できた。

② 『十六歳の日記』

本作は、ノーベル賞作家川端康成（以下、川端）による祖父の介護を記録した日記である。

川端は盲目で寝たきりの祖父と二人暮らしのため、排泄の世話、飲食の介護などを行っていた。川端は、「夜中に何度も起こされると腹が立つのだ。それに、おしっこをさせるのが嫌なのだ（中略）今日は黙って家を出てしまった。けれども学校から帰ると矢張り気の毒であるといふ心が起る¹⁷」というような、介護への率直な心境を書き付けている。このような川端の心境から、祖父の介護に対して常に義務感を背負っていたことがわかる。

さらに、川端は学校を「楽園」と称し、「この言葉はこの頃の私の家庭の状態を最も適切に現はしてゐはしまいか¹⁸」というような表現で例えている。学校に通うことで、介護の義務感から解放されていたことが読み取れる。

しかし、寝たきりの祖父を放っておいたまま通学していたわけではない。近所に住むおみよとお常さんという二人の女性が毎日通って、祖父の介護や家事を手伝ってくれたのである。この二人の女性の助けがあり、川端は学校に通うことができたと考えられる。二人の女性は、川端家の良き理解者であったのだろう。川端の介護に対する義務感は、祖父の介護と家事を手伝ってくれる「人」の存在によって、解放されていったと推察される。

本作から考察できたことは、支援してくれる理解者がいることで得られる解放感が、家族の介護をする子どもたちの負担を軽減するということである。

(2) 表彰制度からの検証と考察

家族の介護や世話をする子どもたちの処遇

を功績として捉えている表彰制度は、過去のヤングケアラーのような子どもたちを考察する上で重要な史料となる。

① 『官刻孝義録』

本作は、寛政改革時に民衆強化策の一つとしてまとめられた表彰事例集である。

寛政元（1789）年、幕府は、全国に向けてそれまでに各地で善行者として表彰された事例を記録の許す限り写し取り、細大もらず書き上げるように命じた。その命をうけて、全国各地から提出された表彰事例を幕府が整理して、享和元（1801）年に『官刻孝義録』として刊行した¹⁹。掲載されている事例は8,600にも及ぶ。

以下、子どもを対象とした二つの表彰事例を紹介する。

孝行者 友蔵十一歳

「美濃郡上本郷村に十作とて高二石あまりもてる百姓あり、嘉蔵友蔵とて二人の子をもてり、十年前より病の身となりしうへに、なりハひもあしくて田畑を売つくし無高のものとなれるをなけき、兄嘉蔵か力にてやうくと一升はかりの高もてる百姓にかへれり、三年ほどこのかたハ十作手足もかなはず、妻と嘉蔵とゝもに人の田を預りつくりて其日を送れるに、弟の友蔵ハまた六ツはかりの比より母と兄の出行し跡にて、すこしも父の側をはなれず看病して、近き村の神事又ハ寺の供養など賑ハしき事ありとても、母のゆるしを得されは外に出る事なし、伯父新兵衛ハ隣にすみし故折々にゆく事ありといへとも、すみやかに帰りけり、母と兄は農事に力を尽して友蔵をいたはりしとそ、寛政二年十一月、領主より褒美として友蔵に米をあたへ又母と兄にもあたへしとなん、時に友蔵年十一とそ聞えし²⁰」

孝行者 助太十八歳

「助太は山鹿郡中村の郷庄村の百姓助市か子なり、幼くして父母に孝を尽し、何事にててもそのむねにたかふ事なし、十五歳の時父をうしなひ、其後ハわきて母によくつかへしか、病多かりしかハつねに家にありて遠くゆかず、或はたまふ出るとても其期を過ぎず、もとよ

り一夜も外に宿れる事なし、次の年の冬、母又重き病にふしけるに、助太昼夜かたはらにありて起臥をたすけ二便の事に心をつけ、汚れたるものはミつから洗ひきよめ、家貧けれども医薬の類はあまねく求め、好めるものハ必ずゝむ、世をわたるへきよすかなけれハ、近き人の家に雇はれ、その賃銭を得て養ふといへとも、母の事のミ心にかゝりて、一日の中に二三度つゝ家をかへり見さる事なし、(中略) 近きわたり松尾の社あり、年ことの祭には歌舞伎やうの事ありて人多く集りしに、其友、助太か家にのミありて苦めるを慰めんとてさそひしか、母のひとり家にありてわひしからんとて出す、つねに人の交りをもなさず髪をもゆふ事なく、たゝ母の側にのミ有しかは、里人ミな孝行殿とそ呼ける、元文元年正月、領主より褒美して扶持米をあたふ²¹」

本史料の事例は、約230年前のものであるが、表彰対象者の背景に「貧しい家計」「介護を一人で背負っている」「介護のために友の誘いを断る」と読み取れる家庭状況を発見できたことは、大きな収穫であった。「令和3年度 ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書²²」にも、「金銭的な支援をしてほしい」「子どもは悩みを一人で抱え込みがち」「友人との交流も限られる」というような、子どもたちの悩みや要望が寄せられている。いつの時代も、家族の介護を担う子どもたちの悩みや要望は共通していることが明らかになったが、未だ解決に至っていない問題でもあることが浮かび上がった。

② 地方自治体の表彰制度から浮かび上がった問題

明治時代になると、新聞報道が情報を得る主要な手段になった。家族の介護や世話をする子どもの表彰記事も掲載されるようになった。以下に、二つの表彰記事を紹介する。

「父母病死後も祖父母と妹の世話を焼く七歳の孝行少女、京都府庁が賞金」

「京都府下銭司村の少女（七年十一カ月）は明治十二年中父が病死後母も引続いて重病に罹り身体も自由に利かぬのを小腕ながらも甲斐々々しく立働きて母の看病怠らずまじいと

けなき妹をよく労はり食事の事から洗濯物などの事も一人で引受け昨年母が病死後は祖母に事ふること父母に等しく一村其孝心を賞さぬ者はない程もゑ此ほど京都府庁より賞金七十五錢賜はり（以下略）」

（『読売新聞』 1881 年 4 月 17 日）

「よい子の表彰 親孝行、兄弟愛が目立つ」 「姉妹で母の手助け」

「表彰される千代田区神田淡路町二ノ十七共立中学二年生〇〇さん（㊦）と、妹の淡路小学校五年生の△△さん（㊦）二人は、一昨秋、父親が急死したので、母親（㊦）は長女の〇〇さんから二人のほか、八歳と六歳の四人をかかえる身となった。幼い子供たちは母の悲しみを心から感じとり、父の商売の氷屋を母を助けて続けることにした。登校前や、放課後は姉妹で氷を得意先へせせと運んだ（以下略）」

（『朝日新聞』 1956 年 5 月 5 日）

このような表彰制度は、規模を縮小し現在も幾つかの地方自治体で続いている。

地方自治体の表彰制度は、1975 年前後に全国的に発生した。その理由は、急速な経済成長への反省として、失われつつあった家庭の見直しを、親孝行の推進に求めようという動きに繋がったためだと言われている²³。

1974 年、神奈川県厚木市では「親孝行都市」を宣言し、その趣旨にのっとり「親孝行運動推進要綱」、「厚木市孝養表彰規則」を制定した²⁴。

当時の厚木市長のコメントが朝日新聞に掲載されているので引用する。

「一田園都市だった厚木の都市化が急速に進むと同時に市民の間に公德心が薄れてきた。孝は『百行の基』という。あくまで人間性豊かな町づくりがねらい」と語る（以下略）」

（『朝日新聞』 1974 年 3 月 31 日）

当時の社会は、経済成長の発展により都市化が進み、核家族が増えるなど家族の様相が変化してきた時代と言われている。親孝行に着目することで、豊かな人間性の回復を取り戻す動きを起こそうとしたのではないかと推察される。

しかし、表彰制度は現在廃止傾向にある。そ

の理由は、表彰に必須とされた他者推薦を辞退する動きが広まったためだと考えられる。

神奈川県小田原市の表彰制度から考察したい。

小田原市は 1986（昭和 61）年から、「小田原市孝養賞」を推薦授与していた。その推薦規定について、「市では「小田原市ほう賞基金に関する条例」に基づいて、今年度から「親に感謝し、孝養を尽くす行為が顕著であり、他の模範となる市民」の方々を褒彰することになりました。候補者については、広く市民のみなさんから推薦を受けることになっています（以下略）²⁵」というように明記されていた。現在「小田原市孝養賞」は、「小田原市青少年善行賞」と形式を変えた。小田原市役所のホームページには、「一創設当時と社会の在り方が変化してきたことなどから、平成 20 年度以降候補者の推薦がない状況にあります。そのため、現行の小田原市孝養賞、善行少年及び善行青年表彰を統合し、新たに小田原市青少年善行賞を創設（以下略）²⁶」と、規定変更の理由に他者推薦が望めないことが記されたのである。

表彰に必須とされた他者推薦を辞退する動きは、「個人情報保護法」の制定やプライバシーを重視する動きの高まりによるものが考えられる。「個人情報の保護に関する法律（個人情報保護法）」が公布されたのは 2003（平成 15）年である。この頃より、他者の家庭の事情に踏み込むことが敬遠されるようになり、あわせて、家族の介護や世話をしていることを知られたくない当事者の意思を尊重しようという、プライバシー重視の影響が大きくなってきたと推察される。

このようなプライバシーを重視する動向は、ヤングケアラーを最も身近で支援する教員の声にも反映されている。「令和 2 年度 ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書」にある中学校、高等学校（全日制、定時制、通信制）の教員のインタビュー調査²⁷では、以下の声が寄せられている。

「ヤングケアラーについては、家庭の問題で踏み込みにくい」

「家庭の問題には入りづらい。しかも、何をしたらよいのか、という答えを持たずには介入しにくい」

神奈川県藤沢市の調査²⁸でも、教員から同様の声が寄せられている。

「相談がないと状況がわからないので支援まで至らない。家庭の中にどの程度入り込んで良いものか悩む」

家族の介護が忙しいために登校できない子どもや、勉強に遅れが出てしまった子どもを支えたい教員が、家庭の問題に立ち入ることを躊躇する声があることを軽視してはならない。子どもたちの最も身近にいる教員が介入しづらくなれば、サポートを求めたい子どもの声を拾い上げることができなくなってしまうからだ。

ヤングケアラーを支援する契機が失われている実態が、地方自治体の表彰制度の考察から明らかになった。

(3) 行き過ぎた家族の介護や世話が招いた事件からの検証と考察

本節では、行き過ぎた家族の介護や世話を担う子どもたちの抱える問題を検証する。

① 「親に捨てられ… 中学生に一家の重圧弟をせっかん死なす 父は蒸発、母はホステス 「学校へ行きたかった」」の見出しによる新聞記事の引用である。

「十四日、大阪・摂津市で幼い弟妹の面倒を見ていた十三歳の長男が弟をせっかんして死なせてしまった。家庭は父が蒸発、母はホステスをしてほとんど家に寄りつかなかった。(中略) 家庭をかえりみない母の無軌道ぶりを近所の主婦がみかね「子供たちがかわいそうだから家に落ち着いたら」と意見したところ逆に「他人の家庭のことに口をはさまないでくれ」とどなり返された。(中略) 長男は署員の調べに対し「学校へ行きたかった。父ちゃんも母ちゃんもいなくてさびしかった。でも弟たちがいたので仕方なくがまんして家にいた。洗たくも炊事もおむつかえもミルクをとかすのも全部ぼくがした」と思い出すように話した(以下略)」

(『読売新聞』 1972年11月15日)

本事件は、子どもに行き過ぎた介護や世話をさせたことで発生したと思われる。記事にある

長男の心境を抄出し、背景に潜む問題を考察する。

「学校へ通いたかった」

「両親がいないことがさびしかった」

このような心境は、親の庇護にある子どもであれば通常感じることでない。子どもとして過ごしたいという当たり前の願いが叶わず、かつ、両親がそばにいない寂しさが長男の孤独感を増長させ、犯行に追い込んだと推察される。

行き過ぎた介護や世話を担う子どもたちは、子どもらしい生活を送りたいと願いながら生きていることが、記事より読み取ることができた。さらに、家族の介護や世話を担う子どもたちに、孤独を感じさせてしまうことは避けなければならないことが、本事件より考察できた。

② 「重度身障者の両親支えた高1が自殺 八王子」の見出しによる新聞記事の引用である。

「東京都八王子市台町四丁目の国鉄中央線で二十九日午後六時四十分ごろ、同市中野山王三丁目、都立〇〇商業高一年、A君(一六)が新宿駅発南小谷駅行き「特急あずさ37号」にはねられ即死した。(中略)

A君の父親は三十年ぐらい前に交通事故でけがをして以来、車いす生活で、母親も脳性マヒによる重度の身体障害者。生活保護で生活しており、A君が炊事や洗濯など家事の多くをやっていた。A君は学校では成績も上位でおとなしく、欠席もほとんどなかった。」

(『朝日新聞』 1987年1月30日)

A君の死から三週間後、「ニュース三面鏡 八王子の「孝行」高1の自殺」の見出しによる記事が掲載された。記事には、A君が死を選んだ背景が書かれている。

「一両親の世話と高校生活を両立させようとするところからくる重圧と将来への不安。内向的性格ゆえに、それらをだれにも相談できず、一人で抱え込んでしまったようだ。(中略) A君はほとんど外に出ずに育ったようだ。保育園も行かず、近所の子どもたちとも遊ぶことは少なかった。小学校に通い出してから内気で、中学の初めごろまでは、級友から何の理由もなしに殴られるなどのいじめを受けたこともあった、という。

高校での成績は上位。生活は規則正しく、母親の寝起きや着替え、夕食づくり、洗濯など家事もよくやった。次第に頼もしくなってくる息子に両親は期待を寄せた。「母さんの具合が悪いからこれからも頼むぞ」「ああ、卒業したら楽させてやるよ」。そんな会話も交わすようになった。友人からの誘いが来ても、両親を気遣って、断ることが多かった（以下略）

（『朝日新聞』 1987 年 2 月 19 日）

本事件発生時、ヤングケアラーの概念はなかったが、新聞では家族への行き過ぎた介護や世話を問題視し、報じている。新聞記事にある A 君の心境を抄出し、背景に潜む問題を考察する。

「両親の世話と高校生活を両立させようとするところからくる重圧と将来への不安」。

「内向的性格ゆえに、悩みを誰にも相談できず、一人で抱え込んでしまった」。

「友人からの誘いがあったとしても両親を気遣い、断ることが多かった」。

以上、抄出した A 君の心境には、二つの問題が潜んでいると推察される。

まず一つ目は、家族の介護の終わりが見えないことからくる将来への不安である。二つ目は、誰にも相談できずに一人で介護を抱えていたことである。本記事には、介護の期間について明記されてはいないが、長期間一人で介護を担ってきたことが推察される。

先述した『十六歳の日記』では、義務感を解放する理解者（祖父の介護と家事を手伝ってくれた二人の女性）の存在がいたことで、介護者（川端）は学校に通うことができるようになったと考察した。本事件の A 君も、両親から期待が寄せられたとあることから、家族への介護に対する義務感があったと推察される。家族の介護をする子どもたちには、介護の義務感から解放させてくれる人が必要であると、本事件を検証し示すことができた。その結果、介護の終わりが見えない不安や、相談できずに一人で抱えてしまう問題も解消されると考えられる。

③ 「「祖母殺した」21 歳の孫逮捕 殺人未遂容疑」の見出しによる新聞記事の引用である。

「8 日午前 7 時頃、神戸市須磨区関守町の住宅で、女の声で「祖母を殺してしまった」と兵

庫県警須磨署に通報があった。（中略）

同署は、現場にいた孫で自称幼稚園教諭の B 容疑者（21）が殺害を認めたため、殺人容疑で緊急逮捕（以下略）」

（『読売新聞』 2019 年 10 月 8 日）

本事件は、B をヤングケアラーと称し、その結果起きた悲劇だとして社会から注目された。新聞の続報や地裁判決も大々的に報じられた。

「祖母殺害 孫に猶予判決 地裁 「一人で介護 きわめて疲弊」」の見出しによる新聞記事の引用である。

「一母子家庭の母が小学生の時に他界し、親戚の家を転々とした。祖母と暮らしたのは中 2 までの数年間。祖母は幼稚園の先生になるという夢を応援してくれ、ピアノも買ってくれた。

数年前に祖父が亡くなり、独りになった祖母は認知症を悪化させた。それでも調子が良いときは、仕事のことを褒めてくれた。しかし次第に徘徊を繰り返すようになる。「私が一緒に住む」。介護を引き受けたのは、幼稚園で働き始めた 1 か月後のことだ。

介護の心労は想像以上だった。祖母の言動は以前のものではない。疲れて帰宅しても夜中に起こされ、2 時間も寝られない日も、体が食事を受け付けられない日もあった。助けを求めた親族には「それくらいコントロールできないの」と突き放され、全てを抱え込んでしまった（中略）。

近年、若者が学業や仕事と介護の両立を求められる『ヤングケアラー』の問題が表面化している。若い人ほど『自分がやらなくては』と追い込まれやすく、人生に及ぼす影響が大きい（以下略）」

（『読売新聞』 2020 年 9 月 19 日）

本事件から浮かび上がった B の背景に潜む問題を考察する。

記事によると、介護の期間は半年であるが、仕事と介護の両立を一人でこなすのには無理があり、B の心身は相当追い込まれていたと思われる。そして、「助けを求めた親族には「それくらいコントロールできないの」と突き放され、全てを抱え込んでしまった」という支援を断られた記事に着目したい。誰の支援も得られなか

ったことは、「介護を一人でこなさなくてはという責任感」と「誰も頼ることができない孤独感」をBに生じさせてしまったと考えられる。まさに親族の対応は、「子どもは家族の介護や世話を担って当たり前」という価値観が根付いていると言えるのではないだろうか。前述した二つの事件と同様に、家族の介護を担うBには、孤独という問題が潜在化していることがわかった。

家族の介護や世話が行き過ぎてしまうと、介護する子どもの孤独感を増長させ、周囲からの孤立を生み出してしまうことになる。それらの要因が、事件を引き起こす契機になることもあると、過去の事件から考察できた。

4. 結論と今後の課題

歴史上長年にわたって、家族の介護や世話を担う、現代のヤングケアラーのような子どもたちが存在し、その背景には「子どもは家族の介護や世話を担って当たり前」という価値観が根付いていることが、史実の検証により明らかになった。さらに子どもたちは、家族の介護や世話をする義務感と葛藤しながら、子どもらしい生活を送りたいという願いを抱いていることが、「子どもを主体」として歴史を振り返ることで確認できた。

本研究の成果は、いつの時代も介護を担う子どもたちの背景に、「経済的理由による労働や介護から抵抗できないでいること」、「一人で介護を担う義務感と周囲からの孤立を生み出してしまうこと」という問題が潜在化し、それらの問題は、現代まで解消されていないという結論を得たことである。

ヤングケアラーに生じている多くの問題を歴史的視点で俯瞰する研究は、未だ発展途上の部分が多い。今回の研究で得た結論を基礎資料とし、ヤングケアラーの研究を発展させていきたい。

注釈

- i. 本研究は史実に基づいた検証を行うため、新聞記事を資料として取り上げた。対象新聞は、朝日新聞と読売新聞の二紙とした。記事の集約については、オンラインデータベースの朝日新聞「クロスサーチ」、読売新聞「ヨ

ミダス歴史館」を使用した。なお、氏名は特定されないよう省略した。

参考・引用文献

1. 三菱UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社 (2021)「令和2年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業 ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書」https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2021/04/koukai_210412_7.pdf (2024. 1. 13 閲覧) .
2. こども家庭庁「ヤングケアラーについて」<https://www.cfa.go.jp/policies/young-career/> (2024. 1. 13 閲覧) .
3. 澁谷智子 (2020)『ヤングケアラー わたしの語りー子どもや若者が経験した家族のケア・介護』生活書院.
4. 仲田海人・木村諭志 (2021)『ヤングでは終わらないヤングケアラー きょうだいヤングケアラーのライフステージと葛藤』クリエイツかもがわ.
5. 澁谷智子 (2018)『ヤングケアラーー介護を担う子ども・若者の現実』中央公論新社.
6. 川浦典子 (2021)「高校卒業を「家庭の資源」からの卒業に」『月刊 学校教育相談』35(1), P. 29.
7. 麻生武 (2016)「ヒトの子育ての歴史を振り返る」『児童心理』70(19), P. 28.
8. 前掲 1 (2024. 1. 13 閲覧) .
9. 山本茂実 (1968)『あゝ野麦峠ーある製糸工女哀史ー』朝日新聞社.
10. 花田裕子・永江誠治・山崎真紀子・大石和代 (2007)「児童虐待の歴史的背景と定義」『保健学研究』19(2), P. 2.
11. 前掲 9 .
12. 前掲 9 .
13. 前掲 9 .
14. 前掲 9 .
15. 工場法・御署名原本・明治四十四年・法律第四十六号 国立国会図書館デジタルアーカイブ [C:/Users/Owner/AppData/Local/Temp/75708158-8df9-4202-93ba-037bf6f4a6e0_141217.zip](https://www.dlib.nic.go.jp/dlib/141217/75708158-8df9-4202-93ba-037bf6f4a6e0_141217.zip) 6e0/141217.pdf (2024. 1. 13 閲覧) .
16. 児童擁護協会 (1933)『児童を護る』児童擁護協会.
17. 川端康成 (1952)『伊豆の踊子・温泉宿』岩波書店.
18. 前掲 17.
19. 菅野則子 (1999)『江戸時代の孝行者「孝義

- 録』の世界』吉川弘文館.
20. 菅野則子 校訂 (1999) 『官刻孝義録 下巻』東京堂出版.
21. 前掲 20.
22. 株式会社日本総合研究所 (2022) 「令和 3 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業 ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書」 https://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/column/opinion/detail/2021_13332.pdf (2024. 1. 13 閲覧) .
23. 勝又基 (2021) 『親孝行の日本史 道德と政治の 1400 年』中央公論新社.
24. 厚木市教育委員会社会教育課 (1976) 『厚木の徳育』厚木市教育委員会.
25. 小田原市 広報おだわら第 446 号アーカイブ https://www.city.odawara.kanagawa.jp/global-image/odawaraArch/10446/pdf/0446_19861101_h.pdf (2024. 1. 13 閲覧) .
26. 小田原市ほう賞基金に関する条例施行規則の一部改正について <https://www.city.odawara.kanagawa.jp/global-image/units/294626/1-20170104191252.pdf> (2024. 1. 13 閲覧) .
27. 前掲 1 (2024. 1. 13 閲覧) .
28. 一般社団法人 日本ケアラー連盟 ヤングケアラープロジェクト (2017) 「藤沢市 ケアを担う子ども (ヤングケアラー) についての調査《教員調査》報告書」 <https://www.manabinoba.com/interview/uploads/yc-research2017%40hujisawa.pdf> (2024. 1. 13 閲覧) .

Historical Considerations of Young Carers

Masato TAKAHASHI

【Abstract】

In Japan, there has long been a value system that sees children caring for their families as a virtue, and some children are forced to care for their families excessively. We believe that without consideration of this issue, we will not be able to solve the various problems of young caregivers. In this study, we have identified the existence of children like the Young Carers and examined the backgrounds and problems they were burdened with by looking back on them from a historical perspective. As part of this work, we took up historical documents based on historical facts.

【Keywords】

Young Carers, Historical facts, Poverty, Isolation